



# 梅根悟の幼児教育課程論に関する研究 : 戦後新教育期の言説に着目して

加藤, 優汰

---

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 19(1):39-48

(Issue Date)

2025-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100497708>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100497708>



梅根悟の幼児教育課程論に関する研究  
—戦後新教育期の言説に着目して—A Study on Satoru UMENE's Curriculum Theory for Early Childhood Education  
: Focusing on Discourses in the Postwar New Education Era

加藤 優汰\*

Yuta KATO\*

**要約：**本研究の目的は、梅根悟（1903-1980）が戦後新教育期に展開した幼児教育課程論の特質を明らかにすることである。梅根の幼児教育課程論は、人間の生活構造そのものを学校カリキュラムとする「人生のカリキュラム」を基盤とし、「遊び」を中核とするコア・カリキュラムとして展開された。「遊び」とは、「かごめかごめ」のような伝統的行事を模倣した遊びではなく、大人の生活そのものを「見学」し、「模倣」することであり、ごっこ遊びや模型作りといった高度な「遊び」であった。これを梅根は「作業単位」と称しており、小学校学習指導要領における社会科に見られる単元の基礎的活動を想定していた。小学校カリキュラム論においては、こうした「作業単位」よりも「行事」などの子どもの生活活動そのものを重視していたが、幼稚園カリキュラム論においては、大人の生活課題を社会機能別に単元化した「作業単位」を、「行事」よりも重視していた。1950（昭和25）年になると、梅根のカリキュラム論は同心円状の構造をとるコア・カリキュラムから三層構造によるカリキュラムへと変化していく。小学校カリキュラム論は、子どもの生活活動を基盤とし、そのなかで直面する課題を解決する学習と基礎学習から構成された。一方、幼稚園カリキュラム論は、仕事・サービス活動・リクリエーションの三層から構成されており、「人生のカリキュラム」を引き継ぐ形の三層構造であった。

**キーワード：**梅根悟、戦後新教育、カリキュラム論、コア・カリキュラム、幼児教育

## はじめに

梅根悟（1903-1980）は、戦後日本の教育改革を牽引した代表的な人物の1人である。戦後新教育期、コア・カリキュラム連盟（1948-1953 以下、「コア連」）及びその改組である日本生活教育連盟（1953-）の設立に携わり、副委員長（のち委員長）として同連盟をリードした。全国の学校に足を運び、教育現場からの教育改革を絶えず目指した梅根は、「実践的教育学者」とも評されている<sup>1</sup>。彼の多面的な活動や理論は、現代学校教育における教育課程に対して、今なおその影響力を持ち続けている。金馬国晴は、現代の「総合的な学習の時間」、新学習指導要領も言う「横断的カリキュラム」、さらに「カリキュラム・マネジメント」の源流として梅根を位置づけている<sup>2</sup>。

そうした梅根のカリキュラム論に関して、多様な

先行研究の蓄積が進められてきた<sup>3</sup>。そのうち、梅根のカリキュラム構造論の変遷について整理した中西修一郎の研究では、梅根のカリキュラム論は「中心課程と周辺課程の二課程論」から「三層四領域論」へと移行していったことが明らかにされている<sup>4</sup>。このように、戦後新教育期に絞って見ても、梅根のカリキュラム論の内実の解明が進められている。一方で、これらはいずれも小学校を対象とするカリキュラム論に主たる研究関心が向けられており、幼児教育という観点から梅根の理論に取り組んだ先行研究が存在しないという大きな課題も見えてくる。

こうした先行研究の傾向は、戦後新教育期の梅根の著作のほとんどが、小中学校における教育課程論、教育方法論、教育制度論に焦点を当てたものであることが大きな要因として考えられる<sup>5</sup>。しかし、梅根のカリキュラム論は、小中学校に限らず、幼稚園

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程／西九州大学

(2025 年 4 月 7 日 受付)  
(2025 年 6 月 20 日 受理)

から大学まで幅広い学校階梯を射程に含んだものであった。つまり、戦後日本の幼児教育課程において進められた改革にも梅根が寄与していることが想定されるのである。したがって、梅根の幼児教育課程論の検討は、幼児教育研究及び梅根研究の重要な課題の一つであると言える。

そこで本研究では、梅根のカリキュラム論の全体像を解明することを目的とし、その基礎作業として、梅根がカリキュラム論を積極的に展開した戦後新教育期に時期を絞って彼の幼児教育課程論に関する言説を整理する。その方法として、小学校カリキュラム論と比較することを通して、梅根の幼児教育課程論の特質を明らかにすることを目指す。

## 1. 「人生のカリキュラム」における幼児教育

### (1) 「人生のカリキュラム」

1949(昭和24)年、コア連の機関紙『カリキュラム』創刊号及び第2号が刊行された。そこには、「生活学校とコア・カリキュラム」と題する梅根の論考が掲載されている<sup>1)</sup>。

ここで展開されたのは、題目から分かるとおり、コア・カリキュラムと呼ばれる同心円状のカリキュラム論であった。その基盤となっているのは、梅根が「人生のカリキュラム」(curriculum vitae)と呼称する人間の生活像であった。金馬国晴は、この「人生のカリキュラム」について「梅根の戦前・戦時下・戦後の思索の集大成」とであると評価しており、「人生のカリキュラム」の展開が梅根のカリキュラム論において重要な意味をもっていたことが伺える<sup>7)</sup>。

戦後初期の梅根のコア・カリキュラムにおいて、幼児教育はどのように扱われていたのか。まずは、「人生のカリキュラム」の概要を整理することから始めよう。

梅根は、生活教育を徹底させようとする場合、「子供の生活経験を中心とした総合的なカリキュラムにならなければならない」とする<sup>8)</sup>。そしてそれは「幼い子供、幼稚園や小学校の低学年だけでなく、だんだん上の方の子供まで、更に中学校、高等学校から、終には大学まですべての学校の児童、生徒学生の教育全体を通じての一貫した教育方針」である<sup>9)</sup>。すなわち、ここに展開されている「人生のカリキュラム」を基礎とするコア・カリキュラムは、幼児教育にも適用されるものである。

梅根は、人の生活を「遊び」「社会奉仕」「職業活動」の三つの領域に区別する。人は「概ね何か一つの専門的な職業を持って」おり、「専門的職業活動はあらゆる人々に共通なあるいは共通であるべき一つの主要生活活動」である<sup>10)</sup>。次に「社会奉仕」であるが、人は「職業活動以外に、誰もがその属する社会のために、その社会の円滑な、平和な維持のた

めに働くことを要請され」ている<sup>11)</sup>。これは、家事的雑用、公共物の利用、交通ルール順守といった「自ら自己の生活時間の一部を割いてこれに充てなければならない用務」である<sup>12)</sup>。さらに、人々は「職業活動」と「社会奉仕」に加えて、生活のなかに「遊び」を持とうとする。趣味やリクリエーションなどの「遊び」は、「現代人に不可欠のものであり、よき健全なる遊びを持ち、それを適正に営むということは個人のためにも社会のためにも甚だ重要である」とする<sup>13)</sup>。その上で梅根は、「職業生活」こそが、大人の生活領域の「中心」であり、その周辺に他の二つの活動が配され営まれるとしている。これを図示したものが、**図1**である<sup>14)</sup>。

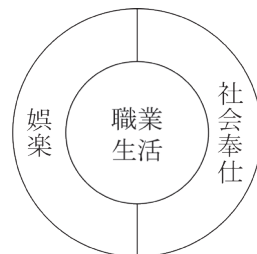


図1. 人の生活構造

さらに、これを人の一生に当てはめて考察した梅根は、「人間の一生はまず遊びに始って遊びに終わるのが常態である」とする<sup>15)</sup>。すなわち、「幼児はまず終日遊んでいる」が、「その内にだんだん子供も家の雑用の手伝いをするようになり、庭の掃除や台所の手伝い、赤ん坊の守り、留守番をするようになる<sup>16)</sup>。こうして「子供の生活は次第に遊びと社会奉仕の二本立てになり、その比重も次第に変化して、後には社会奉仕としての家事手伝いが主で遊びは従となる」とする<sup>17)</sup>。さらに、「子供たちはぼつぼつ職業の見習いを始めるようになり、「次第に職業的活動が中心の位置を占め、大人の生活図式に近づいて行く」のである<sup>18)</sup>。そこからさらに老人に近づくにしたがって、家事が主となっていき、最後には隠居して盆栽などの「遊び」が生活の中心となっていく。これを図示すると、**図2**のとおりである<sup>19)</sup>。

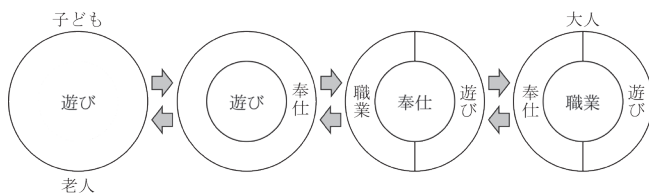


図2. 「人生のカリキュラム」

これが梅根の「人生のカリキュラム」の概要である。そして、梅根が理想とする生活学校とは、「生活することによって生活することを学んでゆく学校である」から、生活学校におけるカリキュラムは「その基本構造に於て、この人生のカリキュラムそのもの」である<sup>20)</sup>。つまり、「学校は子供の遊び場であり、教師は子供の遊び相手でなければならない<sup>21)</sup>。したがって、幼稚園から初等教育にかけては、「コアの内容は遊びを主とするものというべきである」と梅根は主張している<sup>22)</sup>。このことから、幼児期にお

けるカリキュラムは「遊び」を中心にすべきであるという梅根の立場が伺える。

## (2)「遊び」の内容

では、ここで言う「遊び」とは一体何であるか。結論を先取りすると、梅根にとって「遊び」とは「大人の生活の模倣」である<sup>23</sup>。

梅根は、柳田國男(1875-1962)の民俗学からも示唆されて、子どもたちの「遊び」の来歴について整理した。梅根は、子どもの「遊び」とは、「今日或は過去における大人たちの生活―労働と社会奉仕と遊び―の模倣に外ならない」と指摘している<sup>24</sup>。ここで言う「大人たちの生活」は、労働や戦争や祭事をも含むものである。例えば、真ん中に1人目隠しをした鬼役の子どもがいて、その周りを子どもたちが輪になってぐるぐると回って遊ぶ「かごめかごめ」は、昔、村人たちが村の重大事を判断するために行った行事の模倣であると言われる。また、「片足飛び」の遊びは、戦場で負傷して片足の自由を失った場合に備えるための武芸修練であったとされる。このように、子どもの「遊び」は大人の実生活における生活活動の模倣であり、大人の生活を模倣することで「職業生活や宗教行事や戦争などのやり方を身につけて行った」のであるという<sup>25</sup>。その意味で、遊ぶことは「生活の準備」であり、「大人の生活に近づいて行くこと」であった<sup>26</sup>。ただし、「かごめかごめ」や「片足飛び」を含む多くの「遊び」は、「その主体である大人の生活がそれを棄て去っている」ため、「今日の社会に取っては無意味な遊び」であることが付記されている<sup>27</sup>。

また、子どもは大人の生活を単に模倣するだけでなく、「見物」をしている。梅根は、「大人の生活を見ること自体が子供の生活内容であり、それが子どもの広い意味での遊びである」としている<sup>28</sup>。子どもたちは大人の生活を見物することから始めるが、やがて見るだけでは済まされなくなり、それを模倣し始めるという。

しかし、人々の生活は「昔とちがって高度に技術化し目まぐるしく進歩変化しつつある」ため、「広い社会での大人の生活の見物と模倣とは、次第に困難になっている」と梅根は指摘している<sup>29</sup>。つまり、「大人たちの生活は次第に子供の眼界から遠ざかり、子供の眼に見えないところで営まれるようになっていく」という<sup>30</sup>。したがって梅根は、「今日の社会では、放任しておけば子供は今日の社会生活に必要な生活活動を十分に見物したり模倣したりすることは出来」ないとして、警鐘を鳴らしている<sup>31</sup>。すなわち、放任しておけば、子どもの「遊び」は「今日すでにその社会的、教育的意義を喪失してしまっている」遊び、あるいは「限られた生活活動の模倣」

をして遊ぶしかなくなるとしている<sup>32</sup>。

そこで、子どもたちに社会生活の模倣と見物をさせるためには、「近代生活の模倣遊びを計画的に提供してやる必要がある」という<sup>33</sup>。例えば、幼稚園の子どもが紙を折って作った飛行機を飛ばす遊びをする場合、それは小、中学校となるにしたがってだんだん高尚で精密な模型となり、やがて高等学校になると本物のグライダーを製作・操縦して遊ぶようになる。また、幼稚園の子どもがアナウンサーのまねごとをして遊んでいた場合、小学校では放送遊びとなり、高等学校では本物に近い放送設備を用意し、実際に電波を使って送受信をしたり、世界中の放送事業を調べたりすることにつながる。このように、大人が「遊びを用意してやり、それを幼稚園から高等学校まで次第に高尚な遊びとして展開させ」ることが、「近代社会にふさわしい子供の遊ばせ方であり、それが近代的な生活教育である」と梅根は主張している<sup>34</sup>。

このように、梅根の幼児教育課程論は「遊び」を中心として展開されるものであった。ただし、その「遊び」とは、「かごめかごめ」のような伝統的遊びではなく、近代社会における大人の生活の「模倣」や「見物」であり、場合によっては高度な知識や技能を要する実用的な「遊び」であったと言える。そうした「遊び」は、幼稚園から高等学校まで長い年月をかけてさらに高度化していくものであり、ひいては「職業活動」につながりうるものとして想定されていた。

## 2. 幼稚園カリキュラムの現状と内容

### (1) 小学校カリキュラムの「中心(コア)」

1949(昭和24)年後半になると、梅根のカリキュラム論は模索期に突入する。まずは、小学校カリキュラム論についての論述を見ていく。

当時、文部省が学習指導要領に示した社会科のカリキュラムは、アメリカの進歩主義教育思想に影響を受けた「作業单元」を中心とするものであった。「作業单元」とは、人間の生活を再現するような目的活動による実践的な学習や協同学習であり、ごっこ遊びや模型作りなどを通して子どもの自主性や社会性の発達が目指された。当時、この「作業单元」を中核とする授業実践が広く展開されていく。

これに対し、梅根は、「中心(コア)」の内容として「日常生活課程」を提起する。まず梅根は、「作業单元」を中心とする学習指導要領では、年行事(天長節などの国家的祝祭行事、七夕やお盆などの習俗的行事、防火週間などの社会的啓蒙的行事、遠足や運動会などの学校行事)がカリキュラムから排除されている点を指摘した。そして、日常生活から乖離したごっこ遊びや模型作りによる「作業单元」

は、「いつやってもいいもの、やってもやらなくてもいいもの」であるとし、それだけで総合的生活教育とすることを批判した<sup>35</sup>。その上で、子どもの日常的慣習的活動である「行事」をカリキュラムの「中心(コア)」に取り入れるべきであることを強調した。

さらにこの時、梅根は、「作業単位」とも「行事」とも異なる「日常的文化活動」の必要性を指摘している。これは、「常時的に継続的に行われている各種の文化的、組織的活動」であり、例えば「学級新聞の発行、学校及び学級消費組合の運営、学級農場の経営」といったものである<sup>36</sup>。これらは、子どもが日々の学校生活のなかで日常的・継続的に行っていくものであり、時期を選ばないという意味で生活から切り離されていると言える「作業単位」とは区別される。梅根は、「作業単位から成る中心課程の外に、別にこの種の行事や日常的文化活動の課程を用意する必要がある」とし、「行事」と「日常的文化活動」を合わせて「日常生活課程」とした<sup>37</sup>。そしてこの「日常生活課程」を、従来の「中心(コア)」である「作業単位」とは別に、第二のコアとしてカリキュラムに位置づけるべきであると主張した。

続いて、梅根は、生活教育の立場からするとむしろ「日常生活課程」こそ「第一コアに位すべきものであって作業単位の方がむしろ第二コアではないか」と指摘する<sup>38</sup>。ごっこ遊びなどの「作業単位」の系列は、「継続的な日常的文化活動の基底の上にのっかっている上層建築的なもの」であって、基底なものの方がより根本的でより重要であるという見解からすると、「作業単元の系列がむしろ第二コアであると、言ってもいいかも知れない」と述べた<sup>39</sup>。すなわち、年中行事を含む子どもの日常生活そのものを教育課程化した「日常生活課程」を第一コアとし、ごっこ遊びや模型作りなどの「作業単位」を第二コアとして位置づけ直したのである。

このように、小学校カリキュラムの「中心(コア)」の内容について模索していた梅根は、「作業単位」を中心とする学習指導要領のカリキュラムに対して批判的立場をとり、子どもの日常生活をコアとするカリキュラムを提起していた。そして梅根は、中心と周辺という同心円構造を構造的基盤としつつ、そのコアに「行事」や「日常的文化活動」を含む「日常生活課程」を据える方向で小学校カリキュラム論を展開していった。

## (2) 幼稚園カリキュラムの現状

前項では、梅根が小学校カリキュラム論において「日常生活課程」と「作業単位」を「中心(コア)」とし、そのうち「行事」を含む前者をとくに重視していたことを確認した。次に、この時期の幼稚園カリキュラム論について見ていこう。

1950(昭和25)年、幼児教育を主たる対象とする梅根の論考が初めて発表された。それは、東京教育大学内教育学研究室編『教育大学講座第9巻幼稚園教育』(金子書房、1950)に収められた一節、「幼稚園のカリキュラム」である。

梅根はまず、「保育要領—幼児教育の手引き—(試案)」について検討を行っている。1948(昭和23)年に文部省が制定した「保育要領」は、幼稚園・保育所・家庭における手引き書として刊行され、「幼児期の発達や生活の指導、環境についての解説」がなされている<sup>40</sup>。保育内容は、12項目に分けて記載されている。具体的には、「1 見学、2 リズム、3 休息、4 自由遊び、5 音楽、6 お話、7 絵画、8 製作、9 自然観察、10 ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居、11 健康保育、12 年中行事」である。この「保育要領」は、「目標やねらいの具体的な項目は記載されておらず、幼児が楽しい経験としてどのようなことを行うか、どのような姿があるか、また幼児の成長発達にどのような影響を及ぼすかなどについてまとめられ」たものである<sup>41</sup>。

梅根は、この「保育十二項目」について、「全く無系統無秩序にいろいろのことが羅列してある」とし、「でたらめな羅列主義」であると批判している<sup>42</sup>。梅根によると、「保育十二項目」は、1926(大正15)年に制定された「保育五項目」の「伝統の上に立っているもの」とであるという<sup>43</sup>。「保育五項目」とは、同年公布の「幼稚園令」で定められた「遊戯、唱歌、観察、談話、手技」のことである。梅根は、この「保育五項目」に「見学」「ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居」「年中行事」を加えたものが「保育十二項目」とであると整理している。

その上で梅根は、「保育五項目」は「在来の小学校や中学校における伝統的教科としての国語、唱歌、図画、体操、理科に相当するもの」であったとしている<sup>44</sup>。これに対し、ここに新たに追加された項目は、「伝統的な小・中学校の教科カリキュラムには全く存在しないもの」とであるとした<sup>45</sup>。すなわち、「保育要領」に示された保育内容は、「在来の教科的な保育カリキュラムに、新たに非教科的なものをつぎ足したもので、いわば木に竹をついだ形」とであるとしている<sup>46</sup>。

さらに梅根は、「保育要領十二項目」の内容を小学校の教科目と比較して考察する。すると、「保育要領十二項目」は、以下のように置き換えることが可能であるという<sup>47</sup>。

- |             |             |
|-------------|-------------|
| (1) 見学(の半分) | →社会科        |
|             | (ごっこ遊び…を含む) |
| (6) お話      | →国語         |
| (9) 自然観察    | →理科         |

|           |                         |
|-----------|-------------------------|
| (7) 絵画    | →図画                     |
| (8) 製作    | →手工                     |
| (5) 音楽    | →音楽                     |
| (2) リズム   | →体育                     |
| (12) 年中行事 | →課外活動                   |
| (3) 休息    | →管理と指導 <sup>ガイダンス</sup> |
| (4) 自由遊び  |                         |
| (11) 健康教育 |                         |

このような整理によって、「保育十二項目」は「小学校のそれと同様に一つの教科カリキュラムにほかならず」、「小学校のカリキュラムから算数だけを除いたものにほかならない」ことを看取することができる<sup>48</sup>。さらに、「幼稚園のカリキュラムを小・中学校のそれと一貫したものにする意味において」、「保育十二項目」を「小学校の教科名に改めることが適当である」としている<sup>49</sup>。

これに対し、幼稚園の現場はどのような動きを示しているのか。梅根は、「比較的に進歩的と思われる幼稚園プランの多くが、しばらく前に日本の進歩的と自負する一部の小学校で行われていたプランと非常に似ている」ことを指摘している<sup>50</sup>。すなわち、「大単位とは名ばかりで実は小さな単元をいくつかならべ、それを一括し、なんらかの総名を付しただけのもの」に過ぎないという<sup>51</sup>。

では、そこで取り上げられている単元とは、如何なるものか。25の幼稚園のカリキュラムを整理した梅根は、「入園式」「秋の野山」「お正月あそび」「運動会」といった年中行事に関連したものがもっとも多いことを見出しており、「今日の幼稚園のカリキュラムは年中行事中心のカリキュラムといっても過言ではない」と指摘している<sup>52</sup>。一方、年中行事とは異なる単元を見てみると、「ままごと」「郵便ごっこ」「お店ごっこ」などの「ごっこ遊びの形での社会観察」、「昔と今」「日本のはじめ」などの「歴史的な単元」、「わたくしたちの町」「おとなりの町」「ひろい世界」などの「地域社会的単元」、「うさぎ飼い」「花壇づくり」などの「飼育、栽培的単元」、「背くらべ」「たべもの」「きまりよい生活」などの「保健衛生および生活規律に関する単元」が見出される。梅根は、こうした年中行事以外の単元は「小学校の社会科学習指導要領の系統に属するもの」であるとする<sup>53</sup>。こうした「季節や行事にとられるよりも、むしろ一般的に1年中のあらゆる生活問題を社会機能別に分類して取扱う」ものは、「これが1年のカリキュラムかと思われるほど合理的で非生活律動的」な、「近代大都市の生活を背景にしたカリキュラム」である<sup>54</sup>。

このように梅根は、当時の幼稚園のカリキュラムにおいて「年中行事式カリキュラム」と「社会科式

カリキュラム」の二つの類型を見出した。こうした「年中行事主義のカリキュラムと社会機能にしたがって作られた合理主義的な近代的生活単元本位のカリキュラムとを適当にあんばいし、季節と行事のリズムと社会機能的な超季節的単元の系列とをうまく織りまぜ」ていくのが、「今日のわが国の進歩的な幼稚園カリキュラムの動向」であると分析している<sup>55</sup>。

### (3) 幼稚園カリキュラムの内容

では、幼稚園カリキュラムの内容はどうあるべきとされているのか。梅根は、「それが経験カリキュラム的なものであるべきことについては今日ほとんど異論はない」としながらも、「その経験はいかなる経験であるべきかについてはなお十分の考察は行われていない」としており、幼児期に必要な「経験」についての考察が展開される<sup>56</sup>。

梅根は、「幼稚園は幼児の集団生活の場所」であり、「理想としては一地域の幼児が全部そこに集って、連続的発展の原理にしたがって、この年齢の子供にふさわしい理想的な生活経験を営む場所」であるとする<sup>57</sup>。

その上で、「この時期の子供にふさわしい理想的な生活経験」として五つの条件を挙げている<sup>58</sup>。第一に、「将来の生活準備という観点から幼児に強いられる『お勉強』式の学習生活ではなく、かれらにかれらの年齢にふさわしい生活者として充実した生活を営ませるという立場から選ばれたもの」でなければならない<sup>59</sup>。幼児の生活は「遊びを主とした生活である」ことは先に述べたとおりであり、「幼稚園のカリキュラムは仕事や『お勉強』のカリキュラムではなくして、遊びを中心として計画されたカリキュラムであるべき」である<sup>60</sup>。第二に、「ただ遊びだけのカリキュラムであるべきではなく」、「生活の全面に亘るべき」である<sup>61</sup>。幼児は1日の大部分を遊びに費やしているが、幼児もまた家族の一員であり、公共生活の一員であり、職業人でもなくとも仕事の手伝いをすべきであるという。したがって、「単に年中行事やごっこ遊びや遠足や見物ばかりでうずまっているカリキュラムは適当ではな」く、「生産、消費への協力、自治活動など」のほか、「栽培、飼育の経験、清掃、美化の作業など、実際に役立ついわゆる『仕事』の世界」がカリキュラムに取り入れられるべきであるとしている<sup>62</sup>。第三に、「選ばれる生活経験は近代生活上望ましい生活活動」でなければならない<sup>63</sup>。前節で見た「人生のカリキュラム」にも示されていたとおり、梅根は「大人の世界でほとんど（ママ）その意義を失いつつある伝統的行事を幼児の世界においてのみ強調すること」について疑問を呈している<sup>64</sup>。例えば、「都会の大人

たちが農家に対する理解が少いことが一つの欠点である」ならば、「子供に農業の経験をやらせ、農家を見たり、農家の手伝いをしたりする経験をやらせる」べきである<sup>65</sup>。ここまでを小括すると、幼稚園のカリキュラムは「遊び」を主とするものである必要があるが、大人の生活の模倣となる「仕事」もまたカリキュラムに取り入れられるべきである。したがって、幼稚園のカリキュラムは「伝統的な年中行事の中にとじこめることをやめて、もっと近代的な生活の中に子供を押し出してやるべき」である<sup>66</sup>。また、ごっこ遊びなどの「作業単位」の類についても、「可能な限り近代生活についてのごっこ遊びであることが望まし」く、「社会機能の各領域における大人の近代的文化活動の模倣が活発に行われるべきである」とされている<sup>67</sup>。

続いて、第四の理想的な幼児期の生活経験の条件として、「組織的な協力生活のプロゼクトであること」が挙げられている<sup>68</sup>。梅根は、幼稚園を「家庭教育では得られない集団的な社会生活の経験の場」として捉えている<sup>69</sup>。したがって、「そのカリキュラムに盛られる生活経験は集団的で民主的に運営される組織的なプロゼクト」である必要がある<sup>70</sup>。具体的には、「分業の組織について常に討議が行われ、プロゼクトの進行途上常に分業と協同によって、合理的で能率的な作業が行われるように指導が加えられることが望ましい」とされる<sup>71</sup>。第五に、「選ばれる生活経験はそれを通じて幼児の段階において習得し身につけておくことが望ましいと考えられる能力を獲得するのに適した経験でなければならない」とする<sup>72</sup>。その能力とは、言語能力、観察能力、表現能力、体力というような漠然としたものではなく、近代的な社会人として必要な具体的能力が明らかにされるべきであるとしている。例えば、部屋の換気を規則正しくする経験や食前に手を洗うという経験、1日の生活プランを立てる経験などが挙げられている。このように、幼稚園は子ども1人の「遊び」の延長であるべきではなく、「合理的な共同生活、共同労働の態度と技術とを体得すべきところであ」り、そこでの活動は、「広く豊かな、しかも近代的な社会人として必要な経験を反復させるような活動が選ばれるべき」であるとされている<sup>73</sup>。

ここまで見て分かるとおり、梅根は、小学校カリキュラム論では「作業単位」よりも「行事」などの「日常生活課程」を重視していたのに対し、幼稚園カリキュラム論では「行事」よりも「作業単位」を中心にすべきであると主張している。

### 3. 幼稚園カリキュラムの構造

#### (1) 三層構造論の展開

1950（昭和25）年、梅根の小学校カリキュラム

論は、大きな転換を迎える。**図3**は、この時の梅根のカリキュラム構造図を示したものである<sup>74</sup>。

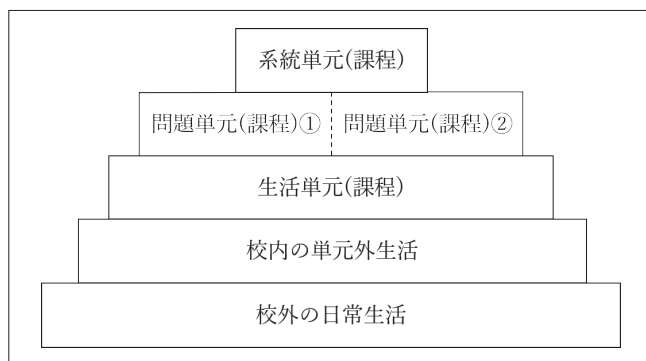


図3. 梅根の三層構造によるカリキュラム論

この図から分かるとおり、梅根のカリキュラム構造論は同心円構造を脱却し、階段状の構造をとっている。この構造のうち、下二段は単位外の日常生活であり、上から三段が学校カリキュラムである。すなわち、梅根の小学校カリキュラム論は、「生活単位課程」「問題単位課程」「系統単位課程」の三層からなる構造へと変化している。

この年の4月、梅根は、「日常生活的活動は例えば農場経営のように長期継続的で、その活動は間欠的で且つ季節的制約を受けているとか、行事のように伝統的に時期が固定されているとかという点で、作業単位とは異なると考えて来たけれども、このような区別は決して本質的ではない」と自らの主張に対する反省の意を見せた<sup>75</sup>。こうした反省の上に、「日常生活課程」こそ生活教育の根城であって、「作業単位」のようなものは結局その延長あるいは一分節にすぎないとし、農場の経営や自治会による学校生活の自治的統制（「日常的文化活動」）、運動会や節分など（「行事」）、ごっこ遊び（「作業単位」）はすべて「生活単位課程」としてまとめられるとした。

この時、梅根は同時に、「直接の目的活動から一応離れて、いわば閑暇の時にじっくりと思考を働かせて、目的活動の中で当场しのぎの皮相的洞察を拡大深化する」単位として「問題単位課程」を設定する<sup>76</sup>。梅根は、目的活動から一旦離れて、生活のなかで子どもたちが直面する課題について思考を働かせながら問題解決を行う単位を、「生活単位課程」との有機的関連を持たせながら一本通すべきことを主張した。このうち「問題単位課程①」は、「総合的社会的な問題単元の系列」、②は、「基礎学習として教科別に指導されたものの一部に相当し、問題単位課程のうち要素的・技術的なものの系列」と、それぞれ説明されている<sup>77</sup>。

これらの上層に、従来「周辺」の学習とされていた理論的・ドリル的な基礎学習を「系統単位課程」として設定している。これを「生活単位課程」「問

題単元課程」と合わせて、三層からなるカリキュラム構造が確認できる。すなわち、小学校カリキュラム論においては、子どもの生活活動を教育活動の基底、そのなかで生じる課題を解決する学習を中層とし、それらの上層として基礎学習を進めていくという三層のカリキュラム構造が構想された。

## (2) 幼稚園カリキュラムの三層構造

では、梅根のカリキュラム論において、幼稚園カリキュラムはどのような構造をとることが想定されていたのか。ここでも結論を先取りするなら、幼稚園カリキュラムの構造として梅根が提起したのは、小学校と同じく三層構造によるカリキュラム論であった。ただし、その各層の内容は、小学校のそれとは異なるものであった。

先述したとおり、梅根は幼稚園のカリキュラムを定めた「保育要領」について、項目別に保育内容を羅列しただけのものであるとして批判している。そのうえで、幼稚園のカリキュラムにも明確な構造化を持たせるべきことを説いている。

梅根は、幼稚園のカリキュラムがどのような構造を持つべきかという問いは、「幼児の望ましい生活構造はいかにあるべきか、ということに帰する」としている<sup>78</sup>。すなわち、幼児の生活にも構造が存在しており、その生活構造こそが幼稚園のカリキュラム構造になるべきであるという。そしてその生活構造は、現代の大人の生活構造に準拠する。

梅根は、現代人の生活を「仕事の時間」「サービスの活動の時間」「リクリエーションの時間」に大別している<sup>79</sup>。人は一定の仕事を持ち、仕事以外の面で社会の共同の福祉のためにサービス活動を含み、そして余暇をリクリエーションに費やす。この三つの時間は、「われわれの主要な生活領域であり、したがってまた主要な生活時間である」という<sup>80</sup>。

これを幼児に当てはめて考えた時、「仕事」に相当するものは、「プロジェクトとしてのいわゆる単元活動」である<sup>81</sup>。それは、「仕事ではなくて遊び」であるが、「共同して、一定の計画にしたがって行われる遊び」であり、「共同の責任において遂行され、その完成が目指される目的活動」である<sup>82</sup>。そして梅根は、幼児の「仕事」すなわち「遊び」が、「大人の職場における仕事の模倣」であることを付記している<sup>83</sup>。この「模倣」は、やがてその中に協力活動を含むようになり、さらに本格的な職場作業の実習に発展していくという。また、それは「近代生活における代表的な生活機能、社会機能に属する典型的な仕事の模倣」である<sup>84</sup>。それは「社会機能的単元の系列」であり、梅根はこれを「作業単元」としている<sup>85</sup>。

さらに、梅根は、部屋をきれいにする仕事、花壇

の手入れやウサギの世話を手伝う仕事、食事の配膳を手伝う仕事といった「サービス・プロジェクトの時間」が配されれるとする<sup>86</sup>。また、「リクリエーション・プロジェクト」には、リズム遊びやスポーツのほか、行事も含まれるとしている<sup>87</sup>。

梅根によると、子どもたちはこうした三つの生活領域にわたる生活を繰り返している。子どもたちは、「毎日まず昨日からの続きの作業単元をつづけてやり、一つの仕事を仕上げてゆく」が、その前後の時間には「いろいろなサービス・プロジェクトに参加」している<sup>88</sup>。さらに、その合間には「スベリ台をすべったり、リズム遊びをしたり、好きな絵をかいいたり、一緒に歌を歌ったり散歩をしたりするさまざまなリクリエーション的な遊びにふける」という<sup>89</sup>。すなわち、「やりかけの仕事をつづけてやる、いろいろなサービスをする、好きなことをして遊ぶ、この三つの領域が適当に布置されて一日の生活は設計される」のである<sup>90</sup>。

このように、梅根の幼稚園カリキュラム論は、「仕事」「サービス活動」「リクリエーション」の三つの層から構成されていた。小学校カリキュラム論は、子どもの生活活動を基盤に、問題解決型の学習と基礎学習との三層で構成されていた。一方、幼稚園カリキュラム論は、同じく三層構造ではあるが、各層の内容は異なるものであった。すなわち、幼稚園カリキュラム論における三層構造は、大人の生活構造と対応したものであり、第1節で見た「遊び」「社会奉仕」「職業活動」からなる大人の生活構造を基礎とする「人生のカリキュラム」の影響が色濃く残っていることが分かる。

## おわりに

本稿では、梅根の幼児教育課程論に関する言説を、戦後新教育期に焦点を絞って整理してきた。小学校カリキュラム論と比較することを通して、本稿で明らかになった梅根の幼児教育課程論の特徴は、以下のように整理できる。

1 点目に、梅根の幼児教育課程論は、はじめ、小学校やその他校種のカリキュラム論と同じく「人生のカリキュラム」を基盤に展開されていた。梅根は、人の生活構造を「遊び」「社会奉仕」「職業活動」の三つに区分し、この構造をそのまま学校カリキュラムに当てはめることでコア・カリキュラムを展開していた。このうち、幼児教育のカリキュラムは、「遊び」を「中心(コア)」とするものであった。その「遊び」とは、過去の行事を模倣した単純な遊びでも伝統行事そのものでもなく、近代社会における大人の生活の「見物」及び「模倣」である。また、そうした「遊び」は、小学校、中学校、高等学校と校種が上がっていくにつれて高度化していくことが求めら

れていた。その最初の段階として、幼児教育が担うべきと梅根が考えた役割は大きなものであったと言える。

2点目に、年中行事を中心とするカリキュラムと大人の生活課題を社会機能別に単元化したものを中心とするカリキュラムが併存している現状を整理した梅根は、前者ではなく後者のカリキュラムを今後の幼稚園カリキュラムのあり方として重視した。すなわち、大人の近代的社会活動の模倣を目的としたごっこ遊びなどの「作業単位」こそが幼稚園カリキュラムの中核に据えられるべきであるとした。同時期の小学校カリキュラム論において、梅根は、ごっこ遊びや模型作りといった時期を選ばない「作業単位」よりも、「行事」や「日常的文化活動」といった子どもの継続的な日常生活活動を重視していた。この点は、幼稚園カリキュラム論と小学校カリキュラム論の大きな差異であると言える。

3点目に、梅根の幼稚園カリキュラム論は、コア・カリキュラムの構造から三層構造へと発展し、小学校カリキュラム論とは異なる三層のカリキュラムを構想していた。梅根が小学校カリキュラム論において、コア・カリキュラムから三層構造によるカリキュラム論へと構造を大きく転換させた1950（昭和25）年、幼稚園カリキュラム論においても同様の変化が見られた。しかし、その三層の内容は小学校と幼稚園で大きく異なっていた。小学校カリキュラム論は「人生のカリキュラム」を基盤とするコア・カリキュラムから、生活活動・問題解決学習・基礎学習の三層からなる三層構造論へと変化していった。これに対し、幼稚園カリキュラム論では、仕事・サービス活動・リクリエーションが三層の構成要素とされた。これは、「人生のカリキュラム」における三つの生活構造と対応しており、その構造を大きく変えることなく引き継ぐ形で形成されていったと考えられる。

このように、梅根の幼児教育課程論は、「作業単位」よりも「日常生活課程」を重視した小学校カリキュラム論とは対照的に、大人の生活活動を「見学」し「模倣」することを目的とする「作業単位」的な「遊び」を中心に展開されるカリキュラムであったと言える。また、戦後の最初期に展開されたカリキュラム論である「人生のカリキュラム」の構造が、小学校カリキュラム論と比べてもより根強く残っており、それに依拠しながら展開されていたことを見出すことができた。

最後に、本研究の課題を2点述べる。

1点目に、本研究が対象としたのは1950（昭和25）年までの幼児教育に関する論考であり、その後の梅根の幼児教育課程論の展開については検討することができなかった。戦後新教育期を経て、梅根の

カリキュラム論がどのように変化していくのかを明らかにすることを1点目の課題とする。

2点目に、本研究は梅根の言説に焦点を絞っており、具体的な理論の実践化の様相にまでふみこんで検討することは叶わなかった。梅根のカリキュラム論が実際の幼児教育現場でどのように実践されたのかを併せて梅根のカリキュラム論を検討することは、今後の課題である。他日を期したい。

## 注

- 1) 中野光『梅根悟—その生涯としごと—』新評論、2019年、まえがきiv頁。
- 2) 金馬国晴「梅根悟 生き方も理論もまさに総合的な教育史学者—総合的・横断的、カリ・マネの源流」『新教育ライブラリ Premier』第2号、ぎょうせい、2020年8月、74頁。
- 3) 例えば、大杉昭英は、梅根の代表的な著作の一つである『問題解決学習』（誠文堂新光社、1954）を中心に問題解決学習論を整理した（大杉昭英「梅根悟の社会認識教育論」全国社会科教育学会『社会科研究』第27号、1979年3月、33-40頁）。また、田中節雄は、梅根の新教育観がもっともよく表されているとして『生活学校の理論』（国立書院、1948）を取上げ、生活学校論を整理した（田中節雄「梅根悟の学校論」椋山女学園大学人間関係学部『人間関係学研究』第1号、2002年3月、187-198頁）。
- 4) 中西修一郎「梅根悟のカリキュラム構造論に関する一考察—戦後初期の理論的展開に焦点をあてて—」『関西教育学会年報』第39号、2015年12月、85頁。
- 5) 例えば、戦後初の著作であり梅根の代表作でもある『新教育への道』（誠文堂新光社、1947）は、「新教育の履歴書」として小中学校における新教育の歴史を示したものであり、小中学校を対象に論じられている。このことは、「この本はおもに小学校や中学校の若い先生がたを相手に、とゆう気持ちで書いたものであります」という文言からも読み取ることができる（梅根悟『新教育への道』誠文堂新光社、1947年、1頁）。
- 6) 梅根悟「生活学校とコア・カリキュラム」『カリキュラム』第1号、1949年1月、5-8頁及び梅根悟「続 生活学校とコア・カリキュラム」『カリキュラム』第2号、1949年2月、6-9頁。
- 7) 金馬国晴「生活・経験か生産・労働か—民教協からの梅根悟・生活教育論批判の再検討—」東京大学大学院教育学研究科 教育学研究室『研究室紀要』第26号、2000年7月、19頁。
- 8) 梅根悟「生活学校とコア・カリキュラム」『カリキュラム』第1号、1949年1月、5頁。

- 9) 同上。
- 10) 同前書、7 頁。
- 11) 同上。
- 12) 同上。
- 13) 同前書、8 頁。
- 14) 同上。
- 15) 同上。
- 16) 同上。
- 17) 同上。
- 18) 同上。
- 19) 同上。
- 20) 同上。
- 21) 同上。
- 22) 同上。
- 23) 梅根悟「続 生活学校とコア・カリキュラム」『カリキュラム』第2号、1949年2月、6 頁。
- 24) 同上。
- 25) 同上。
- 26) 同上。
- 27) 同上。
- 28) 同前書、7 頁。
- 29) 同上。
- 30) 同上。
- 31) 同前書、8 頁。
- 32) 同上。
- 33) 同上。
- 34) 同上。
- 35) 梅根悟「コア・カリキュラムと行事—行事は単元になるだろうか—」コア・カリキュラム連盟『カリキュラム』第9号、1949年9月、6-7 頁。
- 36) 同前書、8 頁。
- 37) 同前書、8-9 頁。
- 38) 梅根悟「日常生活課程の重要性について」コア・カリキュラム連盟『カリキュラム』第11号、1949年11月、11 頁。
- 39) 同上。
- 40) 平松美由紀「保育要領（1948）から幼稚園教育要領（2017）の変遷に関する一考察—保育内容における水に関わる記述を視点として—」『環太平洋大学研究紀要』第19号、2021年11月、3 頁。
- 41) 同上。
- 42) 梅根悟「幼稚園のカリキュラム」東京教育大学内教育学研究室編『教育大学講座第9巻幼稚園教育』金子書房、1950年、130 頁。
- 43) 同上。
- 44) 同前書、131 頁。
- 45) 同前書、132 頁。
- 46) 同上。
- 47) 同前書、140 頁。
- 48) 同前書、141 頁。
- 49) 同上。
- 50) 同前書、157 頁。
- 51) 同上。
- 52) 同前書、160 頁。
- 53) 同前書、161 頁。
- 54) 同前書、162 頁。
- 55) 同前書、178 頁。
- 56) 同前書、185 頁。
- 57) 同前書、193頁。なお、「連続的発展の原理」とは、大人と子どもの間に断絶はなく、両者を連続するものとして捉える原理である。梅根はこの原則のもと、子どもは幼年期から生活の現場で教育され、在来、大人の問題とされた現実社会の問題を子どもたちが真剣に取り上げて研究し、討論し、解決してゆくという連続的な社会的生活教育を志向した（梅根悟『生活学校の理論—新しい生活教育の建設のために—』国立書院、33-35頁）。
- 58) 同上。
- 59) 同上。
- 60) 同上。
- 61) 同前書、194 頁。
- 62) 同上。
- 63) 同上。
- 64) 同上。
- 65) 同前書、195 頁。
- 66) 同上。
- 67) 同上。
- 68) 同前書、196 頁。
- 69) 同上。
- 70) 同上。
- 71) 同上。
- 72) 同上。
- 73) 同前書、196-197 頁。
- 74) 梅根悟「生活単元と問題単元—カリキュラム構造論の反省と批判—」『カリキュラム』第16号、1950年4月、6 頁。なお、括弧内は筆者による。
- 75) 梅根悟「生活単元と問題単元—カリキュラム構造論の反省と批判—」コア・カリキュラム連盟『カリキュラム』第16号、1950年4月、2 頁。
- 76) 同前書、3 頁。
- 77) 同前書、6 頁。
- 78) 梅根「幼稚園のカリキュラム」、前掲注42)、200-201 頁。
- 79) 同前書、202 頁。
- 80) 同上。
- 81) 同上。
- 82) 同上。
- 83) 同前書、202-203 頁。

- 84) 同前書、203 頁。
- 85) 同上。
- 86) 同上。
- 87) 同上。
- 88) 同上。
- 89) 同上。
- 90) 同前書、203-204 頁。